

いのちの葉

毎日を仏法という鏡に

小池
秀章

目次

毎日を仏法という鏡に……………	4
何を依りどころに生きるか……………	8
自己中心の心……………	14
自らの愚かさ気づく……………	19
いつも見守っていてくださる……………	24
逃げている私を……………	28
すべてが光り輝く世界……………	33
人生を根底から支える心……………	38
いたらなさに気づかされる……………	42
次の世代に引き継いでいく……………	47

毎日を仏法という鏡に

経教きょうきょうはこれを喩たとふるに鏡かがみのごとし。

しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧ちえを開発かいぱつす

善導大師「観経疏」

二つの「見る」

「今日、鏡を見ましたか？」と聞かれたら、多くの人は、「はい、見ました」と答えるでしょう。続いて「どうでしたか？」と聞かれたら何と答えますか。

「どうでしたか？」と言われても困ってしまいますが、「別に、普通でした」とか、「少し髪の毛に寝癖がついていました」などと答えるでしょう。まさか「家の鏡は四角かったです」と答える人はいないでしょう。でも、それも鏡を見ていることに間違いはないのです。

「鏡を見る」と「桜を見る」では、同じ「見る」でもその意味が違います。「桜を見る」と言った場合は「桜」を見ますが、「鏡を見る」と言った場合は、「普通」「鏡」ではなく「鏡に映った自分」を見ることを意味します。

実は、仏法ぶつぽうを聞くということは、この「鏡を見る」ということに近いのです。仏法を聞いた時、仏さまの教えは、こんな教えなのかと、客観的に教えの内容を理解しただけでは、本当に仏法を聞いたとは言えないのです。仏法を聞けば

聞くほど、自分の姿が見えてくる。そんな聞き方をしないと本当に聞いたとは言えないのです。

映し出される自分

善導大師は『観経疏』の中で、「お経に説かれた仏さまの教え（仏法）は、鏡のようなものです。いくども読み、いくどもその心を尋ねるならば、智慧を生み出します」と言われています。

仏法という鏡に映し出された自分の姿とはどのような姿でしょう。真実に目覚めた者の教えによって映し出された自分は、自己中心の心から離れられず、煩惱に振り回されている愚かな自分に違いありません。しかし、自分の愚かさ

が知らされたということは、真実のあり方・自分の目指すべき方向が知らされたということでもあるのです。

つまり、仏法を聞くということは、自らの愚かさが知らされると同時に、自らの目指すべき方向が知らされるということなのです。

なお、「いくども読み、いくどもその心を尋ねるならば、智慧を生み出します」というお言葉は、自分が智慧を体得するというより、仏さまの智慧が届いて、真実に導いてくださると受け取った方がいいでしょう。

毎日、仏法という鏡の前に立ちたいものです。